

保田與重郎

清らかな文人

保田與重郎は明治四十三年四月十五日、奈良県磯城郡桜井町（現桜井市）に生まれた。桜井は古代の大倭朝廷の故地であり、古事記や日本書紀、万葉集に描かれた風景と歴史が色濃く残る、わが国の故郷のような地であった。

少年の頃より近世国学者の著述に学びつつ、そこに記された神話や歴史の遺跡、歌枕の地をわが風景として育った。それゆえ保田は、古の日本人の志や心情、暮らした美を、親しく懐かしい風景としてありありと心に描き、しかも、それらを現代の言葉で多彩に著述することができた。さらに、国風の美感と道義の立場から、極めて本質的な近代文明批判を行ない、戦前戦後と変節した知識人がおびただしくあつたなか、志を貫いた清らかな文人だった。



保田與重郎

明治43年（1910）4月15日生
昭和56年（1981）10月4日歿

◀ 昭和12年2月8日、日比谷東洋軒で催された『日本の橋』『英雄と詩人』出版記念会。前列中央に保田與重郎。その右に保田が終生畏敬の念を抱きつづけた、川端康成、佐藤春夫、萩原朔太郎がならぶ



志の軌跡

保田は幼少より俊英で、畝傍中学には首席で入学、大阪高等学校を経て昭和六年に東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学した。翌七年、同人誌「コギト」を創刊、その中心としてさかんに詩や小説、文学や美術評論を発表した。昭和十年には『日本浪漫派』を創刊、その先頭に立ち、リアリズム一色であった当時の文学界に旋風を巻き起こし、一躍時代の寵児となる。

昭和十年代はまさしく保田與重郎の時代であった。二〇代後半から三〇代前半にかけて、『日本の橋』『英雄と詩人』『戴冠詩人の御一人者』『エルテルは何故死んだか』『後鳥羽院』『近代の終焉』『和泉式部私抄』『萬葉集の精神』『芭蕉』『南山踏雲鏡』など次々と著書を刊行、その数は二十九冊に及ぶ。昭和十二年には池谷信三郎賞を、翌年には北村透谷賞を受賞し、文芸評論家としての地位を確立した。これらの著作をとおして、保田は日本武尊、後鳥羽院、壬申の乱、大伴氏の悲劇、後南朝など、偉大なる敗北の史実を追い、そこに勝敗を超越した永遠なるものを描破した。一方で、情勢に便乗する日本主義的言説が横行する戦時下にあつて、先鋭な近代否定論を展開、当局の情勢論をも厳しく批判した。為に、戦争末期には憲兵の監視を受け、昭和二十年三月には病中を応召。そして戦後は一転して、軍部に追隨したと曲解され集中非難を浴びせられる。しかし、保田は一切弁明せず、一貫して志を変えなかった。

戦前に比して戦後は文壇から追いやられ不遇であった、と見なすのは大きく誤っている。その生活や文業において、戦後の保田はあまりに豊かだった。股肱として頼んだ奥西保や高鳥賢司をはじめとする若い仲間たちや多くの同感同憂の知己を得、信従する門弟も全国に数多あった。その文学はいよいよ幅広く奥深く、『現代崎人傳』や『日本の美術史』、『日本の文学史』など数々の名著を上梓、書や歌においても幾多の名品を生んだ。

新学社創立の翌昭和三十三年の暮、保田は故郷の桜井を離れ、京都の鳴滝に居を構え「身余堂」と名付けた。そこで、日常の暮らしそのものを自身の文学と思想の証しとして、終の日まで日本文人伝統の風儀と風懐を守った。みごとな暮らしぶりだった。



また社内では、九回忌にあたる平成二年の十月、本社講話室にて保田與重郎先生追悼会を行ない、社員はそれぞれの思い出話を分かち合った。

その他、近江神宮境内の歌碑建立をはじめ、『保田與重郎全集』の企画・編集、そして現代知性による保田與重郎論を中心とした季刊誌『イロニア』、『保田與重郎文庫』、『近代浪漫派文庫』の刊行など、出版による顕彰事業もつづけている。

「新学社の諸君が、自分たちが、日常最も近い場所、その人を仰いでいたことを誇りとし、新学社の創立と展開に、終始濃やかな教えとともに、我々を激励して下さったことを伝えて、社業を大切に支えて行ってほしいと思う」——高島賢司はこのような願いを後続に託した。



▶ 昭和58年10月1日京都グランドホテルで開催された第1回焔火忌。会の終了後、世話役を務めた者が集まり、前列中央の保田典子夫人を囲んで記念撮影。会の名称は、旧制大阪高等学校時代に保田與重郎が仲間と刊行した短歌同人誌『焔火（かぎろい）』に由来



新学社精神の象徴

創業より没年の昭和五十六年に至るまで、保田與重郎は会長としてあらゆる面で新学社を支えつづけた。

新学社に学問・宗教・芸術・文学など各方面第一級の人物が集ったのも、保田の人望による。先生方はみな、すすんで新学社に協力の手をさしのべたのである。青年時代に文学上の親交があった大日本印刷株式会社の前社長・北島織衛もまた、保田與重郎の新学社のためならと、事業面において甚大なる力添えをした。

保田は社員にも常に親しく接し、仲人をしてもらった社員も数多い。また、新学社を通じて保田ファンになった特約店も全国各地にあった。

保田與重郎先生は、新学社精神形成の中心であった。もし先生がおられなかったならば、今の新学社は無かったと言つてよい。昭和三十二年設立の時は勿論、そのあとも、先生の志と理念を会社の精神とし、また経営上の岐路には必ず先生に相談した。これは先生の亡くなられる直前までつづいた。いづいどんなことを相談したかは今は言えない。これは、高島社長と私の二人しか知らない。新学社存続発展の機微に属することばかりであったためである。

奥西保「新学社の精神」より（社内報「パポテ」第二号一九九五年一月）

保田與重郎から受け継いだ思想や人脈が、新学社誕生の最大の原動力であり、その後も保田は精神的支柱、象徴でありつづけた。新学社に理想と使命を与え、その実現のために社は社風、豊かな人脈や智慧を自然な形で授けたその功績は、あまりに大きい。

しかし、それらを受けとる側にも、高い志と思想、深い教養と器量が必要であった。創業者二人は純粋に、その思想を事業に実現しようとしたのである。

歿後の顕彰事業

昭和五十六年十月四日の保田の歿後、新学社は追悼行事や顕彰事業の数々を行なっている。

三回忌にあたる昭和五十八年より、有縁の人々が一堂に会し保田與重郎の遺徳・遺業を偲ぼうと「焔火忌」が開催された。生前殊に親交厚く新学社との関わりも深い平澤興・中谷孝雄・浅野晃・清水文雄の四人が発起人である。焔火忌はその後平成九年まで八回行なわれ、毎回新学社が世話役を務め、各界より一五〇〜二〇〇名が参会した。

また社内では、九回忌にあたる平成二年の十月、本社講話室にて保田與重郎先生追悼会を行ない、社員はそれぞれの思い出話を分かち合った。

その他、近江神宮境内の歌碑建立をはじめ、『保田與重郎全集』の企画・編集、そして現代知性による保田與重郎論を中心とした季刊誌『イロニア』、『保田與重郎文庫』、『近代浪漫派文庫』の刊行など、出版による顕彰事業もつづけている。

「新学社の諸君が、自分たちが、日常最も近い場所、その人を仰いでいたことを誇りとし、新学社の創立と展開に、終始濃やかな教えとともに、我々を激励して下さったことを伝えて、社業を大切に支えて行ってほしいと思う」——高島賢司はこのような願いを後続に託した。



▶ 『保田與重郎全集』（全40巻 別巻5巻）
保田與重郎逝去から半年後の昭和57年春、当時市谷にあった東京支社内に設置された保田與重郎全集編集室で、門人の谷崎昭男を中心に作業がスタート、昭和60年11月から平成元年9月まで講談社より刊行された。編集から植字、フィルムに至るまでの一切を新学社が担当